
勇者の影

無

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の影

【Nコード】

N3379T

【作者名】

無

【あらすじ】

成績優秀、品行方正、才色兼備、運動神経抜群と非のうちどころがない勇者、火時利ひじりせいや 聖夜。その友人である自分は、常に親友の『影』におり、親友を支えてきた。

そして彼らは異世界に召還された。一方は勇者として、もう一方は影として -

親友がハーレムでチートです。主人公は主に裏を駆け巡り謀略や裏仕事、後始末なんかをしています。

ブローグ

暗い部屋の中で目が覚める。

だるい―何となくそう思う。

だが何時までも寝てるわけにはいけないので起き上がり、ベッドから下りる。

洗面所にいき、鏡を見る、鏡に写った自分は無表情でこちらを見返してくる。

鏡に写った自分は中肉中背、髪はボサボサになっており、絡まっている。

だが身体はかなり引き締まっており、顔立ちも髪がボサボサであることをのぞけばかなり整っている。

しかしそれを打ち消すが如くの無表情であり、また、その雰囲気はどこか人と関わるのを拒否している。

―まあ一番の要因は彼の親友にあるのだが。

水道から水を出し、顔を洗いサッパリさせる。

そうして彼、三軽 二見也の何時もの日常が始まった―

外にでると6月の梅雨明け晴れが広がっている。

携帯の音楽を片耳イヤホンで聞きながら学校に歩いていく。

「二見也ー!」

後ろから声をかけられ振り向く。

「よっ、おはようさん。」

「……ああ」

声をかけてきたのは自分の親友でありクラスメートである火時利聖夜、ひじりせいやアメリカ人の父親と日本人の母親の混血児で東洋人の顔立ちに金髪青眼の二枚目、成績優秀で剣道の試合では優勝したこともあるので女子からは絶大な人気を誇っている。

男子から多大な嫉妬を買っているのは言うまでもないだろう。

ちなみに高校一年にして生徒会長の座についている

「あのさ、今日も頼まれてくんね？」

「……またか、かまわないが？」

「本当か!助かる。」

「……そろそろ自分で処理したらどうだ?そのほうがいいと思

うんだが。」

「いや、わかってるんだけどさ、あうのも怖いじゃんかストーカー。」

そう、聖夜は時々暴走した女子につけ回されることがあるのだ。

だいたい聖夜のファンクラブによって説得されるのだが、それでもやめない女子は自分が処理している。

おもに聖夜への優先券をちらつかせてファンクラブに流しているのだ。

加入してくればあとは内部の女子たちによって抑えられるのでストーカーはなくなる、そのかわりにファンクラブの人数は増えるが・
・・・

「聖夜が誰か一人でも彼女認定するのが一番まるく収まりがつく方法だと思うが。」

「て言われてもな、そんな簡単に決められないだろ、まず告白さえされてないし。」

当たり前だ、女子同士が牽制しあっているのに抜け駆けで告白なんかすればどんな美少女でも制裁をうけるのは間違いない、捨て身に等しい行為だ。

「それに、あいつの事がまだわすれられねえしよ……」

「……紗夜のことか。」

「……」

自然と無口になり暗い雰囲気漂う。

「……とりあえずさっきの件は承知した。」

「ん、あんがとよ、つーかさすが影の生徒会長だな。」

「……聖夜の後始末に奔走してたらそうなたただけだ。」

小学生のころから聖夜は女子がらみの問題を起こしまくっていたので、被害を被らないようにあちこち説得してまわったりしていて、中学のころにそのあだ名が付いた。

自分が策略好きで裏から表舞台を操るのが好きだったというのもあるが……。

確か中一の時に聖夜を妬み襲撃しようとしていた過激派を隣の高校の不良に狂言を流して、物理的に潰させたり、ファンクラブに情報を流して精神的に潰したりしたところからこのあだ名で呼ばれることになったんだっとな。

とはいえこのあだ名はあまりしられていないんだが。

「……聖夜も『フラグメイカー』や『天然ハーレム男』と呼ばれるだろう。」

「それはあいつらが勝手につけたあだ名だつての、女子からしかせまられてないし、俺から誰かに迫ったことはないんだぜ？女子も女子だよ、俺あいつらにそんな好かれるようなことしたっけなあ。」

「不良に誰かが絡まれていれば躊躇なく助けにはいり、誰かが怪我をしそうになれば自分が身代わりになる。そうして助けた女子は皆例外なくお前のことを好きになっているからな、しかも自分の彼女がお前に鞍替えしたりするから男子から嫉妬を買うのは当然だ。」

「逆恨みじゃねえか！」

「ああ、だからお前は悪くない。」

「そういつてくれるのは二見也ただけだぜほんと……。」

そんな話をしながら学校まで歩いていく、しかし -

「静かだな……」

「ああ……」

そう、静かだ、だが単純な静けさではない。

車の音も風の音も小鳥のさえずりも人の声も草木が揺れる音も水の流れる音もTVの番組の声も動物の鳴き声もすべてすべて聞こえない。

「おかしいよな、ここ住宅街だぜ？横の家から全く音がしない。」

「それに、ここまで人一人あつていない……やばいかもな。」

「うえ?!二見也のやばいはマジでシャレにならないぞ!」

その時 -

「あれ、なんだ？」聖夜の声に後ろへ振り向く。

みると空中に黒い裂け目のようなものが漂っている。

「BLEACH?」

「……ボケるタイミングじゃないと思うんだが。」

黒い裂け目は次第に巨大になっていき家一つ分ぐらいになった。

「なあ！？」

「ッ！」

その瞬間まるで吸い込むように一気に風が吹いた。

「くっ！」

とつさに近くの電柱に捕まり耐える、しかし -

「うわあああああああああ！?!?!」

「聖夜！」

聖夜だけはつかまれず、黒い裂け目に吸い込まれていった。

そのとたんに風がやみまた静かになる。

「・・・・・・」

電柱から手を離し、黒い裂け目にちかづく。

黒い裂け目は聖夜さえ飲み込めばよかったのか少しずつ小さくなつていく、近くによっても吸い込もうとしない。

（どうするか・・・・）

聖夜を飲み込んだ裂け目をよくみると向こう側に石壁みたいなものがみえる。

（異世界、か・・・・）

この裂け目のむこうに石壁が見えるとなると異世界しか考えつかない、どこかの国にでも勇者してでも呼ばれたのだろう。

（聖夜を追うか、あいつの場合は優秀だが無敵ではないからな。）

こちらの世界に未練はない、両親はすでに死去しており、自分を育ててくれた祖父母も寿命で死んでいる。

「いくか。」

黒い裂け目はかなり小さくなっておりもう一人分しかない。

自分はその中に歩いて入っていった。

そして黒い裂け目は消え、日常が戻った。

フラグメイカーの由来（前書き）

修正版です。

フラグメイカーの由来

ドサッ！

「いたっ！」

スタッ -

「・・・」

石畳の上に落とされると急に数十人の『兵士』に槍を突きつけられる。

「δ ξ λ § ! η ψ !」

首筋に切っ先が触れるくらいに刃を当てられる。

「※ § !」

その時、凜とした声が響きわたり、『兵士』は槍を下げる。

聖夜はいきなり槍を突きつけられて軽く驚いていたようだがすぐに立ち上がる。

向こうではなにやら兵士と誰かが話している。

回りを見渡すと石壁に囲まれており、扉は奥に一つしかない。

足元にはゲームなどに出そうな魔法陣があった。

「いてて・・・ここどこだ？」

「さあな、わからん。」

「あれ?!なんで二見也までここに?!」

聖夜とこそこそ話しをしていると、『兵士』が離れ、真ん中から一人の『少女』が出てきた。

ローブをかぶっており顔がよく見えないがドレスをきている。

「誰だ?あれ。」

「・・・おとなしくしといたほうがいいと思うんだか。」

『少女』は目の前までくると何かをつぶやく。

すると自分達の体が少し光った。

「なんだ？」

「ああ!やっと通じました!」

「は？」

「お願いします勇者様!この国をお救いください!」

聖夜Side

は？！勇者！？全く持ってわけわからん！

「ちよつちよつと待ってくれ！いきなりそんなこと言われても」「あ、申し遅れました。私、フラクトル帝国第一王女、フラクトルⅡアリシアⅡクラウシユルと申します。」

フラクトル帝国？そんな国聞いたことないぞ！

「なあ、あんた王女様なんだよな。」

「貴様！姫に対し無礼だ！跪け！」

姫の横にいた男が剣を突きつけてくる。

「ま、まてよ！そんなことしたらあんた殺人罪で捕まるぞ！」

「何を言う！姫に跪かないこと自体が罪なのだ！」

「やめなさいバルト！」

「しかし・・・」

「いきなり別世界から呼び出したのです、礼儀がわからず当然です。下がちなさい、バルト。」

「はっ」

横にいたバルトとかいう男は渋々といった感じで剣を引いた。

・・・正直殺されるかと思った。

「申し訳ありません、バルトはいい騎士なのですが少々頭が固く・・・」

「い、いや、いいんだ。それよりさっき別世界から俺達をよんだって言ったよな。」

「はい、魔王を倒すためにあなた方・勇者様を召喚致しました。」

・・・まさか小説やラノベを実体験するとはめになるとは。

でも無理だろ！？小説とかと違ってリアルだよ！？魔王討伐とか無理ゲーすぎるよ・・・

ん？確かこういう時のテンプレってたしか・・・

「なあ、俺達は元の世界に帰れんのか？」

「それは・・・」

王女様は困った感じで（顔がフードで隠れていてわからん）顔を背ける。

OK、その反応で理解した。

「わかった、とりあえずこの問題は置いておくことにしよう。」

「申し訳ありません・・・」

王女は腰を90度折り謝罪してくる。

「あ、いや、そういうつもりじゃ・・・」

怖い！怖いよ！周りの兵士がめっちゃ睨んできてるよ！？

「と、とにかく顔を上げてくださいー！」

このままじゃ視線で殺されかねないぞ！？

「はい。」

あつぶね〜てかバルトとかいう人の殺気がハンパなかった、マジで殺されると思った。

「あの、それで引き受けて貰えるのでしょうか。」

「とりあえず今の状況を説明してもらえるかな？俺達を別世界から召喚したということはそれほど切羽詰まっているってことだろ？」

状況がわからなきゃ対策もできないからな。

「はい、わかりました。」

とりあえず王女の話しを要約するところだ。

どうやら魔国グランとは数年前までは普通に同盟を組んで交易などをやっていたらしい、しかし二年ほど前に魔国グランの首都グラヨドで宰相が軍事クーデターを起こし、当時の魔王や魔王族（こつちで言う王族のこと）を捕らえ、政権を無理やり奪い取ったらしい。

政権を奪い取った宰相・ヤクドは人間との同盟を破棄し、人間を滅ぼすことを宣言、これに対し人間は他の国と同盟を結びこれに対応している。

このファラクトル帝国は魔国グランの国境と隣接しており、すでに国境を突破され、ファラクトルの首都アクラムの近くまで魔族の軍がきているらしい。

これが王女から聞いた今現在の状況だ。

「お願いします勇者様！この国をお救いください！」

「でもいくらなんでも軍勢に一人で立ち向かうことなんてできないぞ？」

「その点については問題ありません、国上げて宰相と将軍が向こうの軍勢を全て引き受けるそうで、魔国の軍勢も総力戦の構えを見せています。シュルトムの砦に軍勢を引き付け、そのあいだに別ルートでうしろに回り込みながら少数精鋭で領地を解放していき、挟み撃ちにする計画です。」

「なるほど……って俺が失敗したらこの国は潰れるってことだよな。」

「別世界の方々に救いをもとめるのは我々でも理不尽だとは思っています、ですが、あまりにも時間がないのです！お願いします！向こうの世界に帰る方法は私が必ず見つけます！この国をお救いください！」

「……救ってください、か。」

「分かった、引き受けるよ。」

「ほんとですか！」

「でもその代わり！」

王女が体をビクツとさせたがここは無視！

「この世界の人、つまり君にも手伝ってもらおう！」

「え！私ですか？！」

いや姫さん以外にいないでしょうに。

「この戦争は本来この世界の人達が解決しなければいけないと思う

んだ、いまみたいな状況にまた陥ったらまた別世界から自分たちのような人間を呼び出すのか？」

「し、しかし……」

「別世界から勝手に呼び出して勇者にすることというのは……その人の人生を狂わすことになるんだ。」

「狂わす？」

「例えば王女が俺達みたいに勝手に召喚されたら？」

「それはだめです！父様や母様や国民や兵士をのこして勝手に召喚などされたら……あ。」「そう言うこと、家族や友人と離れられなくなってしまう。だからこそこの国がもう別世界の人間を呼ばなくていいように君達自身が強くないといけないんだ。」

「私達自身が……」

王女や周りにいた兵士達は俺の言葉を聞いて考えこむ

「もちろん俺も協力する。だけど自分一人じゃあきつと無理だ、だからこそ協力してこの戦争を乗り越えればいい、また俺達みたいな人間を呼ばなくていいように力をつけて。だから、いっしょに戦おう！」

しばらくして王女は自分を隠していたフードをとった。

蒼い長髪がなびき、透き通った金色の目がしっかりとした『意志』をもっていた。

そこには絶望で頼ることしかできなかった王女ではなく自分の力で希望をつくろうとする『王女』がいた。

「分かりました。私が、第一王女である私が、勇者様に協力いたします。」

「姫?!」

「バルト、あなたも勇者様の話を聞いていたでしょう。別世界の間にもいつまでも頼るわけにはいかないのです。」

「……わかりました。」

王女はこちらに向いて年相応な少女の笑みを向けてくる。

「これからよろしくお願いします勇者様。」

「ああ、よろしく。王女様。」

そういつて俺も笑った。

聖夜の必殺技『天使の微笑み』が無意識に発動した!

純粋率100%!

落とし率120%!

「……////////////////(ボンッ)」

効果は抜群だ!

二見也 side

落ちたな。

あの笑顔を見せられて落ちない女はまずいないからな……

しかも無意識だから余計に夕チがわるい。

聖夜は被害が広がらないと自覚しないからな。

「あ、そうだ、二見也はどうするんだ？」

「……自分はもう少し考えてみる。」

「そうか、まあお前の事だから色々考えてんだろっな。」

するとボーンとしていた王女が帰ってきて、話かけてくる。

「あの、そちらのかたは……」

「ああ、俺の親友の

「三軽二見也だ。」紹介させるよ！」

「おかしいですね、召喚で喚んだのは一人だけの筈ですが……」

「だろっな、自分の意志でここに来たからな。」

「なっ」

「ええっ?!」

二人はかなり驚いている。

「お前なんで！」

「あつちの世界には飽きた、黒い裂け目が残っていたからそこを通ってきただけだ。」

「そんな、ありえません！」
「これたものはこれたんだ、しかたないだろ。」
「おまついいのかよ！」
「構わないさ、家族は全員死んでいるからな。」
「……あー、そうだったな、わりい。」
「……どうでもいいが王女が困ってるぞ」
「え？」
「あ、あの……」
「ああごめんごめん、まあ二見也は俺の親友だし、心配はないよ。」
「そ、そうですか。」
「ごめんな、放つといちゃって。」

ナデナデ

「あつ……／＼／＼／」
「あ、ごめん！つい……」
「いえ……／＼／＼／／／」

完全に落ちたな……

「で、ではとりあえず今日は部屋で休んでいただいて、明日父上に
あってください、部屋まで案内します。」

「……とりあえずのところはよし、そう思い右ポケットのシャ
ーペンを離す。」

簡単に信用して殺されるのはただの馬鹿、小説やラノベみたいに簡単に事が運ぶ可能性も低いからな。

王女や騎士たち、聖夜に続き自分も部屋を出た。

一夜（前書き）

めっちゃ遅れた、申し訳ない

一夜

部屋を出ると外は暗く、明かりがない。

「少しまで、今火をつける。」

すぐにバルドという若い騎士が、松明を近くにあった蠟燭で火をつける。

どうやら塔の中だったらしく、下に螺旋階段が続いている。

下りていく途中、壁に穴があいており、月の光が差し込んでいる。

「みるよ二見也、俺達ほんとに異世界に来ちゃったんだな……」

その穴から巨大な城が見える、月明かりに照らされ、どこか圧倒される感じがある。

「あれが王の城です、帝国建国当時からある我が国の象徴です。」

「へえ、あんなところすんでるんだ王女様は。」

「……ア・アリシアで構いませんわ勇者様。」

「あ、そう？じゃあ俺の事も聖夜でいいや。」

「え？！で、出来ませんよ！勇者様にそんな言い方！」

「じゃあ俺もアリシアって呼ばないよ？」

「それは……その……ううう、意地悪です。」

「そうか？まあ少しずつなれていけばいいよアリシア。」

ナデナデ……

「はい……セイヤ様／＼／／」

その光景を兵士達は暖かい目で、バルドという騎士は微妙な表情で見ている。

さっきの聖夜の話しで、兵士達は聖夜を勇者としてみており、尊敬と憧れの視線もある。

「姫、そろそろ城の方に向かいましょう。」

「あ、そ、そうですね、行きましょう、行きましょう。」

王女は顔を赤くして軽くテンパリながら先にいく、聖夜はやはりよく分かっていないようで、首を傾げながらついていく。

・・・やはり無自覚か、とはいっても聖夜に非はないんだがな。

少し長い廊下を歩いていき、部屋と思わしき場所につく。

「ここがセイヤ様の部屋となります、しかし二人召喚するとは思ってなかったで、他に部屋があるかどうか・・・」

「え？他の部屋は？」

王女は困った顔になりながら。

「すみません、勇者召喚にともなって貴族達もこの王城にきている

ので、あるかどうか・・・」

「じゃあ俺と二見也がいつしよの部屋に入ればいいんじゃない？いいよな、二見也。」

「ああ、かまわない。」

だがそこでバルドが話に入ってくる。

「いや、確かもう少しさきにいったところに部屋があるはずだ、そこならあいているだろう。私が案内しておきますので王女様は自室にお戻りください、勇者殿もです。」

そう言いバルドは兵士に手早く指示をだす。

「この部屋の守衛はサグとヤクルでやれ、それ以外の者達は王女様を自室に、私はこの者を部屋に連れていく。」

「しかしバルド・・・」

「もう夜も更けております、あとのことは私がやっておきますので、お戻りください。」

「・・・自分のことには構わなくていい、早めに王女様も聖夜も寝といたほうがいいだろう」

「そうか？・・・じゃあ俺先に寝るな、また明日な、アリシア、二見也。」

「・・・ああ」

そう言い、聖夜は部屋に入ってしまった。

「なら私も自室に戻りますわ、ええと・・・ニミヤ、様？」

「二見也でかまわない・・・王女、一言いっておくが聖夜に早いとこ告白したほうがいいぞ、あいつは無自覚に女を惚れさせていくからな。」

「ふえっ！？わ、私はそんな、惚れてなど……」
「……ではおやすみ、王女様。」

いまだにイヤイヤしながら否定してくる王女を無視してバルドともにまた廊下を歩いていった。

「で、なにか話があるのか？バルド……さんをつけた方がいいか？」

無言で前を歩いていく騎士に自分は問いかける。

「……正直にいつてお前は信用できない。」

「……なぜ？」

「兵士に槍を突き付けられても全く動じた様子がなかった、むしろ右手を腰の中に入れていた……まるで中に短剣でも忍ばせているかのような。」

気付かれていたとはな……

「……正確にはただの棒切れのようなものだかな」

「そうか、殺気はなかったしお前は今まで全く表情を変えていないからなかば勘だったのだから。」

「……」

「お前はいつたい何を考えている？お前達が呼び出されたときセイヤ殿は驚いていたのにお前は全く驚いてなかった、いつたいなにが目的でこちらにきたんだ？」

そこまで読みきるか、いや、だからこそ王女に進言したりできるんだろうな。

「あの部屋……」

「召喚の間か？」

「あそこでもいったと思うが自分の家族は全員死んでいる、聖夜が吸い込まれた、いや、召喚された時にあいつには支えがいるだろうと思ったからこちらにきた、それだけだ。」

「……そんな理由でか？」

「……他人からみればくだらない理由でも、自分にとっては意味のある理由だ、この答えでは満足しないか？」

バルドは足を止めこちらに振り返って自分の目を見る、意識していないようだが軽く殺気も滲みでている。

「……嘘はついていないようだな。」

「嘘をつく理由がない。」

「……この部屋で今日は休んでくれ、明朝に起こしにくる。」

少し古ぼけた扉がありバルドはそこを指差す。

「あと私のことはバルドでかまわん、ただ一言いっておく、お前が帝国に仇なす存在ならば——切る。」

「自分も二見也でかまわない、あと自分は勇者じゃないし、聖夜が

この国に協力する限り力をかそう。」

「お前は……なぜあの友のためにそこまでできる？」

そう言われ少し思い出す――

――血と硝煙の臭い

――激しい銃の発砲音

――目の前で頭がなくなった死体

「……あいつには心を救ってもらった、それだけだ。」

バルド side

奴は最後にそう言って部屋の中に入っていった。

―心を救ってもらった、か。

一瞬ニミヤが哀しい顔を見せたような気がしたが、きのせいかな？

まあいい、取り敢えず―ッ

後ろに気配を感じ、とっさに飛び退き剣を抜く。

「私です。」

「ラナか、おどろかすな。」

安心し剣を鞘に収める。

目の前には侍女服をき、頭に白いリボンをつけた女、髪は長く腰の辺りまであり、目は赤色に輝いている。右手には蝋燭の灯籠を持っている。

「で、なんのようだ？王妃着きの侍女長、いや、暗部のラナ。」

そう言い彼女を見据える。

「いえ、下が騒がしかったので様子を見にきただけです、それと。」

ラナは私の足元に氷の玉をいきなりぶつける。

「おい！なにを！」

「松明を離さないでください、カーペットが焦げてるじゃないですか。」

呆れ顔でわたしの足元の松明を拾う、カーペットにはしっかりとコゲあとが残ってしまってる。

「む、す、すまん……というか気配なしにお前が後ろに立つからだろう。」

「だからといって松明を落としてカーペットを焦がした理由にはありません、これ直すの私たちなんですからね。」

「だからといって魔法を飛ばすことないだろう……」

さすがに自分も仏頂面になってしまっ

「それもそうでしたね、すいません。」

ん？ そうだ、ラナなら見張るのは得意だろう。

「ラナ、頼みがあるんだが―」

「この部屋にいる方を見張ってれば構わないのですか？」

「ああ、暗部の誰かに頼もうと思っていたからな、ニミヤはどこか危険な感じがする。」

「そこまで危険な人物だとは思いませんが？」

確かに、だが確実に何かを起こす、確実に。

「変な話したが勘なんだ、ニミヤは必ず何かを起こす、そう思うんだ。」

「それならむしろあのもう一人のほう何か起こしそうですか？」

「ああ、勇者のほうは問題ない……あれはもはや英雄の器だな、王とおなじ覇気があった、あの歳でな。」

「何歳でしょうか？」

「見た目からいって15、16ぐらいだ。」

「それはまた、異質ですね。その歳であなたにそれだけ言わせるとは……」

「人を引き付けてやまない感じがあった、しかも今日初めてきたこの世界にたいしてもあまり動揺していなかったからな。」

あの男、初対面でアリシア様を惚れされるぐらいの美形の持ち主でもあるしな。

・・・正直あの美貌は羨ましすぎるぞ。

「そうですか、まあ明日見ておくことにしましょう。明日は私が二ミヤ殿を起こします、バルドは姫を起こしてください。」

「・・・アリシア様は寝坊が多いから困る、新しく入った侍女も姫を起こすだけで一苦労といっていたしな。」

はあ、と思わずため息をついてしまう。あの方は起きないときはとにかく起きない、頭を5回ぐらい全力でひっぱたかないと起きない、侍女にそんなまねもできるはずないから私がやるしかない。

「姫の寝坊癖はなかなか直りませんからね。あ、あと訓練所で朝っぱらから大声だして素振りしないでくれます？うるさいので。」

「いや、騎士として鍛練を怠るわけにはいかん！」

「だからといって朝から大声ださないでください！静かにやってくださいよもう・・・。」

「む、むむう・・・。」

ここまで言われて少しへこむ自分だった。

聖夜Side

「はぁ・・・・・・・・ほんとにきちまっただなー、異世界。」

一人大きなベットに寝ころびながらそう思う。

こんなべたな展開は小説かラノベぐらいしかないからな。

部屋の中は西洋風で窓が両側に二つある。

「父さんや母さんどうしてるだろうな・・・・・・・・」

父さん悲しむだろうなあ、あの人親馬鹿だし、ついでに馬鹿だし。
母さんはいつでものほほんとしてたし・・・・・・・・

「あれ？なんか悲しくなってきた。」

なぜか少し思い出したただけなのに急に涙が出てくる。

「こんな俺涙もろかったっけな・・・・・・・・」

そういえばなんだかんだで家族でいっしょなのが普通になってたな。
アメリカに行ったときに山で迷子になったときは父さんが大声だし
ながら必死に俺のことを探してくれたんだよな。

帰ったら滅多に怒らない母さんから2時間の説教を受けて。

あれは正直トラウマものだったな・・・・

思い出すと体が震えてきて

「やばい、まじでトラウマだ……」

……帰れないのかな、俺達。

「二見也のいうとおりさっさと寝た方がいいなこりゃ……」

翌日の早朝――

アリシア side

今、私は護衛の交代時間の隙について部屋を抜け出し、コソコソと聖夜様の部屋に向かっています。

え？なぜって？もちろんセイヤ様の寝顔をmi……ゲフン

もちろんセイヤ様を起こしに行くだけです、召喚したのは私なんですからセイヤ様のことは私がお世話して差し上げないと。

……寝ている間にあんなことやこんなことをしようとしてるわけじゃないですよ？ええ、絶対。

そんなことを思いつつ部屋の前までくる、しかし二人の兵士が扉の前で立っており、どうしようか悩む。

「あ、とんでいけばいいですね!」

廊下の窓を開け、そこで魔法を使う。

「『レフェルド』」

体がふわりと浮き上がり、そのまま空中にでる。

「ええと、たしかあそこでしたね。」

外側からみるとわかりずらいからいやですね……あ、ここです。

窓に鍵はかかっておらず、音を立てないように部屋に入る。

……いた、ベットに横になってこちら向きにねている。

「はう／＼……やっぱりセイヤ様はかっこいいです。」

まさに勇者と呼ぶにふさわしい顔立ちです。

「あら?」

そっとちかづいてみると、枕が少し濡れており、両目から涙が流れ

ている。

「父さん・・・母さん・・・」

セイヤ様が呟いたその言葉に私は責任を感じた。

私達の勝手に召喚し、それでいて私達を受け入れてくれた。

セイヤ様の人生を、私は狂わせてしまったんですね・・・

私はそっとベットに乗り、セイヤ様の頭を膝に乗せてゆっくり撫でる。

「セイヤ様・・・私がこんなことをいう資格はないとは思いますが、でも、私は今誓います、セイヤ様がこの世界にいるかぎり私は常にセイヤ様の味方であることを・・・」

それが・・・私にできる精一杯の罪滅ぼしだから・・・

「そんな言い方はないんじゃないか？」

「え？」

聖夜 side

なんか撫でられる感じがして目を覚ましたら、いきなりアリシアがそんなことをいつていた。

「アリシア、どうしたんだよいきなり。俺の味方だとかいいだしてさ。」

「……私は、あなたを召喚しました、そのせいで、セイヤ様は家族と別れてしまいました。」

「ああいや、別に俺は……」

「いえ、私はセイヤ様の人生を狂わせてしまったんです、その罪滅ぼしになるなら……」

そういうことか……

「そんないいかたするなよ、アリシアだって困ってたんだろ？しよ
うがないじゃないか。」

「しかし……セイヤ様は泣かれていました。」

「え？」

そう言われ枕をみるとないたあとが微かに残っていた。

寝ている時に泣いていたのか……

「……私は、取り返しのつかない事をしました、ですから「まった。」えっ」

「確かにそうだけども、そんなに背負わなくてもいいと思うんだけどな、おれは。」

「ですが……」

「大丈夫だよ、今アリシアが慰めてくれたおかげで少しはマシになったし、帰れないってわけじゃあないんだろ？それにさ、アリシアは俺のことを手伝ってくれるんだろ、それでいいんじゃない？」

「セイヤ様……ありがとうございます。」

「うん、わかればいいよ、じゃあそろそろ起きー」

ガシッ

「へ？」

「まだだめです、もう少しこうしてもらいます。」

「いやなにいつて、てか今俺どこに頭を乗せてー」

「私の膝です」

「いやいや、ならなおさらおきないと」「お嫌いですか？私の事」
「ウルウル」
「うっ……」

ええい、そんな顔しないでくれよ！

「はあくわかった、後ちよつとだけな。」

「はい」

バンッ

「セイヤっ！王女様がいないのだ！どこにいるか……」

「あ」

「あ」

扉を開け、一瞬バルドさんは固まり、そして――

「きいいいさまああああ！アリシア様になにをしたあああああ
！」

「え、ちょ、まっ？！」

「き、昨日の今日で、貴様という奴はああああ！」

キレてる！めっちゃキレてる！そして誤解されている？！

「切り捨ててくれるううううう！」

「あぶねえ！あぶねえから剣振り回すな！だからちよつ、うわああ
あああああ？！」

誤解だー！

二見也 side

ん？何かあったのか？やけに向こうが騒がしいな。

「147・・・148・・・」

逆立ち腕立て伏せをしながら声を聞いてると聖夜がまたなにか起こしたらしい・・・絶対王女絡みだな。

「失礼します・・・キャア?!」
「誰だ？」

扉を開け入って来たのは髪を白いリボンで止め、侍女服の格好をした目の色が赤い女。

「あ、申し遅れました、私は侍女長のラナ・ウェルラと申します。」
「なんのようでしたんだ？・・・149」
「いえ、起こしに参ったのですが、まさかそのような格好とは思わず／＼／」

上半身裸だからな・・・仕方ないか。

「すまないな、見苦しい格好で・・・150」

このくらいでいいだろう、そう思い体をもとに戻す。

そのままベットに置いてある学生服を着ながら話をする。

「・・・で？これからどうしたらいい？」

「朝食をお持ちしておりますので、まずはそれを、昨日からなにも食べておられないと思うので。」

「ああ、ありがとう。」

まだ少し顔を赤らめながらも落ち着いた対応をしてくる。

扉が開き、ワゴン、ではなく木でできた簡素な小さい物を押してきて、部屋にある小さな丸テーブルの上に食事を並べていく。
食器も木で出来ており、パンとスープがそれぞれ盛り付けられてい

る。

「朝食の準備ができましたのでどうぞ。」

「ありがとう。」

「あ……はい。」

「……どうかしたか？」

「いえ、普通なら侍女に礼を言われる方など滅多にいないので、珍しいと思いましただけです。」

「そうなのか？こっちの方では当たり前のことなんだが……」
「はあ……」

……とりあえず朝食を戴くとするか。

「……いただきます」

そういつて黙々とパンから食べ始め、スープを飲んで終わった。

「……ごちそうさまでした」

「……？」

みると侍女がこちらを不思議そうにみている。

「ああ……俺の国でのご飯を食べる際の作法だ、気にしないでくれ。」

「あ、申し訳ありません、お皿をお下げいたします。」

侍女が横で片付けるのをみつつ、これからどうするかを考える。

とりあえず聖夜の所に行くか。

「ラナ、でいいのか？」

「はい、何でしょうか？」

「聖夜……勇者の所にもいいか？」

「はい、構いません、私もおもいたします。」

なぜついてくるのかわからないが……まあいいか。

ラナ side

部屋に入った途端びっくりしました、まさか上半身裸でいるとは思

いませんでした／＼／

しかしあまり本人は気にしていないようですが……

「そういえば名前をいつてなかったな、……三輕 二見也だ。」

「私は侍女長のラナ・ウエルラ、ラナとお呼びください。」

「自分も二見也で構わない。」

「わかりました二見也様」

そういつてたら勇者様の部屋の前に到着しました。

「はいってもいいか？」

「はあ、構いませんが、しかし……」

そういつて守衛は微妙な表情をする。

部屋の中からはなにやら叫び声がきこえる。

「かまわない、入るぞ聖夜。」

扉を開けると――

王女様と勇者様が正座させられて説教されてました。

「……………」

「……………あいつのまわりではよくあることだ、気にするな」

「はあ……………わかりました。」

もはや呆れしかないが、とりあえず説教がやむまでしばらくまつの
でした。

と言つか説教長い……………はやくしてくれないかしら、はあ……

一夜（後書き）

ラナの口調と心のなかのしゃべり方は少し違います。

謁見（前書き）

やっとできました、遅れてもうしわけない

謁見

10分ほどしてようやくバルドの説教が終わった、王女が自室を抜け出し、聖夜の部屋に勝手に入っていたことが原因らしい。

・・・聖夜は完全なとばっちりだなこれは。

「うっう、私この国の王女なのに。」

「何で俺まで・・・」

・・・御愁傷様。

聖夜達はまだ朝食をとっておらず、王女と食べてくるらしい。

いや、引きずられていったという方が正しいか。

そのあと王に謁見するらしいが、時間がある。

暇、といつてもやることはある。

「ラナ、答えられる範囲でいいから答えてくれ。」

部屋にもどり、開口一番そういう。

「は？」

ラナの方はまったくわけわからないという顔をしている。

「簡単なことだ、この世界にきてまだ知らないことが多すぎる、情報が欲しい。」

「なるほど・・・私に答えられる範囲でならばお答えします。」

「なら最初の質問だ―

その暗器はなんだ？」

ラナは一瞬だけ目を泳がし――

「え？なんのことでしょうか、私は何ももっていませんが？」

と、惚けた顔で答える。

・・・まあいいか。

「ならいい、次の質問だ。」

ラナ side

まさかっ？！気付かれた？！

さっきはああ答えたものの内心私は驚愕していた。

ここまで私は暗器に一度も触れていないし、ミスもしていない、なぜ？

困惑する私をよそに彼は――

「ならいい、次の質問だ。」

・・・？

なぜ？

私に暗器があるかどうか聞いた時点で何かしらあると思うのが普通なのに。

・・・この人は予想以上に大物かも知れない。

バルドの勘もあながち捨てたものではなかったようですね・・・

二見也 side

そのあとラナにいくつか質問してわかったことがある。

魔王軍本隊の数は三万、シュトルムの砦の両側は山に囲まれており、魔王軍はそこをとらなければ王都にこれないこと、別ルートは貴族が押さえており、そこから領土を取り戻すために軍を進めようとしていることなど、とりあえず情報は得られた。

他にはこちらの兵力は二万程度ということや、魔王軍本隊の足止めは三ヶ月程度ならなんとかなることなどを聞いた。

「しかし思ったんだが、なぜそこまで攻めいられたんだ？」

「魔王軍は予想以上に強力です、しかも翼を持っているものが多いので飛んで応戦したとしても空中戦が苦手なこちらはどうしても押されてしまいます。さらには魔獣まで使ってくるので手に負えない事態に……。」

「さて、人間が空を飛べるのか？」

「はい、魔法を使えばですが……そんなに珍しいことでしょうか？」

さすがに少し驚いた、魔法はあったとしても空を飛べる魔法があるとは思わなかったからだ。

「……自分の世界では飛べる人間はいなかったからな。」
「そんな世界もあるんですね……」

その時扉をノックする音になり、侍女が入ってくる。

「失礼します、謁見の準備が整いましたので、玉座の間にお向かいください。」

「私が案内いたします、セイヤ様の方は？」
「もう既に向かわれております、では、失礼いたします。」

綺麗に一例し、侍女は出ていく。

「すぐに向かいましょう、何か必要な物がありますか？」
「これだけだ。」

ラナに自分の手に持った学生カバンを見せる。

「わかりました、では案内いたします。」

そして自分達は部屋を出た。

長い廊下が続き、途中四つの階段を上り、今はセイヤと合流し、豪華な門の前にいる。

門の前には銅色の鎧を着て、銀色に光る少し短い三ツ又槍を持った兵士が二人いる。

「王様かぁ、どんな人だろうな、始めてみるな。」

「……王女はどうした？」

「ああ、アリシアならバルドに連れられてどっかにいったよ、王様の隣に座ってるってさ。」

それはいい、それはいいんだが……

「……お前に抱きついていて翼、いや、羽か？を持っている侍

女は誰なんだ？」

ラナと同じ侍女服を着た少し背の低い緑髪緑眼の美少女が聖夜に抱きついてこちらを見ている、ツインテールでさらにその背には薄い羽の様なものがはえている。

「ああ、侍女の子だよ、こっちは俺の友人の三軽二見也。」

「二見也でいい。」

「わ、私は風の妖精のクランといいます、よろしくお願いしましゅ！……うう、噛んじゃった。」

……また増えたか。

「ん？どうかしたのか？」

「いや……何でもない。」

小さなため息を思わずついてしまう。

隣にいるラナも気付いたのか呆れ顔だ。

すると、その時扉が開く。

「どうぞ、お進み下さい。」

兵士にそう言われ自分と聖夜は入っていく、中は天井の綺麗なステンドグラスから光が入っており、玉座に続く廊下には貴族が並び、階段には先ほどの門番と同じ装備をした兵士が並び、玉座には王と思われる白い髭を生やした男とその横に王妃と思われる女性がいる。

その横には隣にバルドを控えさせた女王もいる。

「ようこそ勇者殿、私がファラクトル帝国現王、ファラクトルⅡリクトラⅡクラウシュルじゃ。隣にいるのが我が妻、ファラクトルⅡナリアⅡクラウシュルじゃ。」

少々やつれた声で現王は自らの名を名乗った。

周りをみると貴族達もやつれた者達が多く、顔からあまり生気を感じない。

かなり疲弊しているようだ。

その時王の隣の男がいう。

「ええい！無礼だぞ！王の目の前にいながら礼のひとつもしないとは！」

「落ち着け、彼等はまだこちらに来たばかり、作法などわかるはずもなかるう。」

「しかし……」

「宰相、分かってくれ、今はこの勇者達に頼るしかないのだ。」

王がそう言うのと宰相はすぐに下がる、少々やつれてはいるものの、宰相はまだ眼から生気を失っていない。

悪い人間ではなさそうだが、客観的にみて。

宰相の隣には豪華な鎧、というには随分と使われた後がある鎧をきた將軍らしき男もたっている、こちらは何も言うつもりはないらしい。

「セイヤ殿、ニミヤ殿、厚かましいかもしれない、勝手に呼び出して何を言っているのかと思うかもしれない、しかしもはやこの国に戦う力はない、頼む、この国をどうか、助けてはくれないか？」

「私からもお願いしますわ、勇者様。」

王と王妃、この国のトップ二人が頭を下げる、貴族達が少しざわついたが、自分達も頭を下げる。

「……おそらく断れば殺されるだろうな、王女が苦虫を潰したような顔をしていたからな。」

「あ、あの、みなさん顔をあげてください!」

・・・まあ、聖夜の場合は問題ないな。

「自分達は勇者を引き受けます！」

なんせ正義を具現化したような男だからな。

王 side

「おお、本当かお二方！」

ワシは正直に言ってこんな賭けをするつもりはなかった、こんなことをしても意味はないと思っっていたからだ。

確かに、伝説として異世界からきた強力な力を持つ者がこの国を500年前に作ったとは記されていた、いまではわからぬ古代文字で書かれた魔方陣もあった。

しかし、いくらなんでもそんな伝説に頼るわけにはいかなかった、
それでは王として失格だからだ。

だがまさか本当に召喚するとは！我が娘はよくやってくれた！伝説
通りならこの者達は強大な力をもつはず、言い方は悪いが利用させ
てもらう。

まあ、娘にこれを話したらものすごく怒られたがな、地味にへこん
だわい……。

「セイヤ殿にニミヤ殿、では早速正式に勇者認定の儀を「まってく
れ、俺は引き受けないぞ。」は？」

いきなりそういいだしたのはセイヤ殿の隣にいるニミヤ殿。

セイヤ殿もニミヤ殿の発言に驚いている。

「な、なぜじゃ？何か問題でも？」

「俺が勇者をやりたくない理由は三つある。」

「……申してみよ。」

ニミヤ殿はセイヤ殿と違って、至って普通のような感じの男であり、
顔はこの玉座の間に入って来たときから無表情だ。

「まず第一に、面倒な権力争いに巻き込まれたくないからだ。」

「それはどういう意味だ？」

「……簡単なことだ、勇者が二人もいれば余計な奴等が権力を手にするためにどちらかを担ぎ上げ、それに対抗してもう一方も勇者を担ぎ上げる、そんなことにはなりたくない。」

「まさか！戦争でただでさえ疲弊している我が国の者達に、そのような考えをするものはおらん！もちろん平時でもそのような者はおらん！」

ふざけたことを抜かしおる、国の中にそのようなもの、昨年処刑した奴等以外にはいまい！

「……第二に、戦場での指揮系統だ。」

「しき……なんじゃ？」

「簡単なことだ、戦場に勇者が二人もいてはどちらに付き従えばいいのか兵士達がわからなくなる。いくら統率がとれていても、勇者が二人もいればそうなる、そうならないための処置だ。」

「ふむ……將軍、どう思う？」

ワシは自らのとなりにいる將軍に聞く。

「確かに、無用な混乱を戦場に巻き起こす可能性は否めません、この者の言うことにも一理あるかと。」

黒い髭を触りながらそう言ってくる、うむう。

「……つづけていいか？」

「ふむ、構わぬよ。」

「三つ目の理由だが……」

「……簡単にいえば面倒くさいからだ。」

「は？」

「奴は今なんといった？面倒くさいだと？」

「き、貴様そんな理由で勇者の申し出を受けないなど、ふざけているのか?!」

一人の貴族が言い出したのを皮切りに周りの貴族達も口々にニミヤ殿に文句をいい始める。

だがニミヤ殿はそんな貴族達の罵声を受けても無表情でいる、まったく感情を読めん。

セイヤ殿が何か言おうとするがニミヤ殿がそれを止める。

「ええい落ち着け、落ち着かんか!ここは玉座の間であるぞ!」

宰相が手早く貴族達を抑え、再び静かになる。

「・・・そんなふざけた理由で勇者の申し出を断るだど?お主はふざけておるのか?」

「ふざけてなどいない、いきなりこの世界に呼び出され、勇者になれたど?いきなり過ぎるも程がある、それに力を貸さないといつてるわけじゃない。」

「?、どういうことじゃ?」

「自分はいくまでも、友人としてセイヤに力を貸す、だからセイヤ

がこの国を救おうとするかぎり俺も力を貸す。」

「なるほど、友人には協力するがこの国には協力したくないと言うことか？」

「……そういうことだ、権力争いなんかに巻き込まれたくないからな。」

こやつ、なかなか喰えんのお……

するとワシの隣にいた妻が囁く。

「あなた、今はこの者達の力を借りるのが先です。とりあえず条件を飲んでおきましょう。」

「しかしのお」

「いくらでもあとから融通はききます、後でセイヤ殿から説得させるなりなんなりすればよろしいのでは？」

ふむ……妻は内政に長けておるからな、ここは条件を飲むべきか？

「それに、今ここであなたの器の大きさを示しておけば、貴族達もあなたへの忠誠を誓うでしょうし、勇者が来たとなったら兵の士気の向上にも繋がるでしょう。」

「ふむ、飲んで損はないか。」

ナリア side

「……よからう、お主の条件を飲もう。」

「王?!」

「いったいどうなされたか!こんな無礼な者の条件をのむなど!」

夫がそう言った瞬間口々に貴族どもが騒ぎだす、鬱陶しいったらないわね。

「落ち着けい!今、我が帝国は存亡の危機にさらされておるのじゃぞ!」

貴族どもは夫の言葉を聞いて少しは落ち着く。

「今ここで首をはねても状況が変わるわけではあるまい、それに我らがこの者達を呼んだのじゃ、条件はあれど断られるより良いではないか。」

夫は勇者達にもう一度頭を下げる。

「頼む、この国を救うために力を貸してくれ……！」

貴族どもも夫にならい頭を下げる。

本当、こういう演技だけは上手いんだから。

するとセイヤ殿が、

「構いません、自分の達の出来る範囲で力を貸します。」

「おお……！」

「……でも、僕達だけではこの戦争を終わらせることができません、皆さんの力が必要です。」

急に演説のような口調になりはじめた、なにをするきだ？

「自分はこの国の人達を助けたいと思っています、でも、自分のせいで人が死んでほしくないと思っています。」

「……それは綺麗事だ、戦争で誰も死なずに終わらせるなど不可能だ。」

将軍がセイヤ殿にたいし言い返す。

「わかっています、綺麗事です、でもそれを望んで何が悪いんでしょうか。」

自分はこの戦争を出来る限り被害をださずに終わらせたい、その為には自分の命も賭けるつもりです。

だから、皆さんにお願いします、どうか自分達に、力を貸してください。」

……深々と頭を下げる彼に、私は驚愕していた。

きたばかりの世界で、きたばかりの国で、これだけのことを言える人が何人いるだろうか。

口で言うのは簡単だ、だがそれを実行できる人間が何人いるだろうか。

容姿も相まってどこか神々しい感じまでしている。

夫がゆっくりと話し出す。

「セイヤ殿、こちらからも、よろしく、頼む……！」

貴族も自然に、自分から頭を下げる、もちろん私もだ。

そこにいる皆がセイヤ殿に惹き付けられた、たった一人を除いて――

謁見（後書き）

今月は一話しか投稿できませんでした、次こそは二話投稿します。

武器庫 宝物庫（前書き）

頭がヒットした結果がこれ。

武器庫 宝物庫

「あーっ！緊張したーっ！」

玉座の間を出るなりそう言い体を伸ばす聖夜。

先ほどのカリスマは微塵もない。

「しっかしお前なにを言い出すかと思ったらよお……こっちはヒヤヒヤしたぞ。」

「……お前には協力するがこの国に協力したくはなかったからな、面倒事に巻き込まれるのも嫌だしな。」

「だからってあんな言い方すれば誰だって怒るだろ……」

するとこっちに、何処からでてきたのか、バルドが向かってくる。

「あれ？バルドさん？いつたい何処から……」

「ああ、こことは別に扉がひとつあってな、そこから出てきたんだ。しかし……セイヤ殿、先ほどの発言はまことか？本気でこの国

のために命を賭ける気か？」

バルドは聖夜に真剣な顔で問いかける、聖夜はことも無さげに。

「はい、自分は困っている人や助けを求める人を見捨てられませんか。……あんなにやつれている人達をみれば、どれだけ激しい戦いかぐらい分かりますから。」

「そうか……貴殿はお人好しだな。」

「それ二見也にもよく言われんだよなあ」

「はは、そうか。」

それで……ニミヤ殿はこういったことは二度としないほうがいい、下手をすれば切られるところだったぞ？それにあの発言には私も怒りを覚えた、なぜ面倒くさいなどといったのだ？」

「……普通の反応だと思うが？いきなりこの世界に呼び出されてこの国のために勇者になれ、強制命令も良いところだな、使えないと知ったら切り捨ててるつもりだろう。」

「……」

バルドは顔をしかめ、目を逸らす。

「……まあ大丈夫だ、聖夜が勇者をやっているかぎり、俺はこ

いつを影から助けるだけだ。」

「すまぬ、確かによくよく考えてみればあの発言も妥当なものだったな。」

「あ、それでバルドさん、俺達これからどうすれば……」

「ああ、お二方には取り敢えず武器を選んでもらおうと思う、今から宝物庫に連れていくので着いてきてくれ。」

しばらく長い廊下を歩いたあと、先ほど玉座の間の門の前にいた兵士と同じ装備をした兵士が二人いる。

頑丈そうな鉄でできた扉には、かなりデカイ錠がかかっている。

「セイヤ様〜!」

「セイヤ様!」

向こう側から急に聖夜の名前を呼びながらなにかが飛んできて――

ドゴォ

「ぐはっ?!」

聖夜に直撃した。

「セイヤ様」

「バルド！セイヤ様は私が案内すると行っただでしょう！勝手につれていけないでください！」

・・・まあ、いつものことだな。

向こうでもよく突っ込まれていたからな・・・

「王女様、落ち着きを、セイヤ様にそのように抱きつかれては迷惑でしょうに、クランも離れなさい。」

「姫・・・常に落ち着きを持った行動をするようにと申しただしように・・・」

後からラナも着いてくる、こちらは落ち着いているようだ。

「あ、申し訳ありません、つい・・・／／／／／」

「あう……ごめんなしゃい。」

二人はすぐに離れる。

「あはは、いいいいよ、いたた……」

「王女様、宝物庫の鍵のほうは？」

「ありますわ。」

そういつて王女は首にかかっている十字架をとり、鍵穴にあてる。

ガチリと音をたて、錠が外れる。

「さあ、お入り下さい。」

中に入るとあちこちに高価なものと思われる腕輪や王冠などがある。

だが一番おおいのは盾や剣といった武器や装備だ。

「こりゃ宝物庫って言うより武器庫だな……」

「この国はよく戦争に巻き込まれることが多く、どうしても王族専用の武器が必要になることが多かったのだ。」

「ふん……」

しばらく進むと辺りが暗くなってくる。

ラナが壁についている蠟燭に火をつけ、辺りを明るくしながら進む。

「あれです、あれがこの国に伝わる『聖剣』です。」

見ると一つの台の上に細長い鉄の箱、のようなものがある。

「この中に聖剣があります、このファラクトル帝国を作り上げた初代帝王が持っていた剣です。」

「こついつちや悪いけど、何か胡散臭いなあ。」

「まあ、そうでしょうね、私も初めて見たときただの錆びた剣でしたから。」

「アリシア様、王女であるあなたがその様な言い方を「わかってます。」」

「ですが、セイヤ様とニミヤ様を召喚できました、伝説通りなら、聖剣は持ち主のもと、つまり異世界人であるあなた達どちらかに力を貸すはずです。」

王女は鉄の箱を開け、その中にある一振りの鞘に入った剣を取り出す。

鞘には豪華装飾がしてあるが、かなり時間がたってしまっているのか、所々錆びている。

「どちらが本物の勇者、もしくはどちらも勇者、あるいはどちらも勇者ではない、それがはっきりします。」

王女は聖夜に剣を渡す。

「この中には聖霊がいると言われていますが、剣を引き抜けば出てくるはずですよ。」

「わかった。」

聖夜は剣を引き抜こうとする。

「あれ……?」

引き抜こうとする。

「くっ、ぐぐぐぐぐぐぐ。」

すこしずつ錆びた刀身が出てくる、そして。

「そりゃああああああああっ!」

スパッ

「はぁ……はぁ……やっと抜けた。」

「ずいぶんと錆びていますから、引き抜くのも一苦労でしたな……」

「セイヤ様! なにか、なにか変化はありましたか!？」

「いや、特になにも……ってなんだ!？」

急に刀身が光だし、辺りが白く塗りつぶされる。

「つつ……?!」

「王女様！後ろに！」

自分は思わず目を覆い、バルドはすぐに王女を後ろに下がらせる。

しばらくすると光は急に消え、聖夜が持っていた剣から錆びが完全に消えていた。

「おお……」

「すごいです」

「流石セイヤ様です！」

「このようなことが……」

皆が皆感嘆したり驚いたりしている。

「うはあゝすげえな、ん？」

聖夜が感心していると再び剣が光り出す。

「なっまたかよっ?!」

今度は一瞬だけ光り、そして剣が消えた。

「あ、あれ、剣が……」

「フッフ、こちらですわ主様。」

……さすが異世界、ありえないことばかり起きるな……

聖夜の目の前には光り輝く女性が一人立っていた――

聖夜 side

は？ いやちよつとまで誰だこの人。

自分の目の前には銀色の髪をたなびかせたドレスを着た美女が立っている。

・・・というか胸がデケエ！Gはあるぞこれ。

「に、二見也、誰だ？この人。」

「・・・信じられないがお前の持っていた聖剣らしい。」

無表情ながらも手で眉間を押さえている、二見也もこの事態が信じられないようだ。

「あら、よくわかったわね、そう、私がこの聖剣に宿りし聖霊、セレンティスアですわよ主様♪」

「は、はぁ・・・」

アリシアの方を見るとかなり驚いていた。

「まさか・・・武具聖霊が本当に、宿っていたとは。」

「セレンティスア様?!」

急に克蘭が大声をだす。

「ど、どうした？克蘭。」

「聖霊、セレンティスア様は私達精霊族のなかで伝説として語り継がれてるんです！私達にとって神にも近い存在ですよ？！」

「あらら、500年経った間に伝説になっちゃったかしら？一応存在してるんだけどねえ……」

「あ、あわわわ申し訳ありましえん！」

・ クランがすごい勢いで頭を下げまくっている、てか大丈夫が頭……

「フフフ、気にしなくてもいいわ。さて、それでは主様、私と本契約を交わして戴けませんか？」

「本契約……？」

「本契約というのは私の力を扱う為に必要な契約ですわ、先ほど剣を抜かれた時に仮契約を交わしましたので、すぐに本契約に入れますわ。」

「武具聖霊、それも最上級の聖霊……セイヤ様、契約しておくべきです、セイヤ様自身にとって大きな力となります。」

「え、でもいいのか？」

「構いません！セイヤ様が勇者とわかったのなら父も許可するでしょう。（文句をいったって無理矢理認めさせるんですから！）」

「そうか？ならその本契約って奴を頼むよ。」

「ええ、わかりましたわ、それでは……」

セレンティスアは何故かこちらに近づいてくる。

「セ、セレンティスア？なんか近いような……」

「あら、セレンで構いませんわ主様、なにも怖がることはありません、力をお抜きになって♪」

そういつているあいだにもセレンは近づいてくる。

綺麗な銀色の目で見つめられる。

「フッフ、それでは失礼いたしますわ主様♪」

「何を……んっ？！（チュッ）」

「ん……むう……（クチャ）……んう」

「つ~~~~~~~~？！」

「「あああああああああっ?!?!?」」

ちよつ、いきなりディープキス?! しかも胸が、胸がああああ!

「ん・・・(チュツ)はあ・・・」ごちそうさまでした」

「ななななななにやって」

「あら? 私は本契約しただけですわよ?」

「いいいいいいいくらセレンティスア様といえどもこここここここれは・・・」

「あらあら、いいじゃありませんの、500年もこんな部屋の中にいて欲求不満でしたの」少くく多目にみてくださいいな」

「見えるわけないでしょう! ふざけているんですか?!」

「他にも契約方法があります! なんでその・・・あの・・・キ、キスを・・・」

「それが一番手っ取り早かったからですよ、無駄な口上を長々語るよりはいいでしょう?・・・それとも、二人してこの殿方に惚れているのかしら?」

「な、ななな何を言うんですか、わ、私はただこの国の王女として・・・」

「ふえ?! しょ、しょんなことありゆわけ・・・あるわけ・・・
うううう／＼／／／」

・ ・ ・ なにこの状況。

「フッフ、末永くよろしくお願いしますね主様」

「あ、あははは．．．．．よろしく、セレン。」

鎌

聖夜は女に困ることがないな・・・

そう思いたため息をつく、そしてそのしわ寄せがこちらに來ないことを願う。

「ラナ、バルド、自分の武器は・・・」

「ぐおおおお・・・」

「はい、何でしょうか？」

・・・何故かそこで呻きのたうち回っているバルドは無視だな。

「ああ、この人ですか？セレンティスア様を見たときから鼻を伸ばされていたので、少々痛い目にあっていたいただきました。」

満面の笑みでこちらにそう言うてくる。

・・・自業自得だな。

取り敢えず聖夜の方はおいでるか、しばらくしたら収まるだろう。

「自分も武器が欲しい、見回ってみてもいいか？」
「わかりました、私も行きましょう。」

「色々あるな・・・。」

「その時代その時代の英雄と呼ばれた人達の武器も保管しているの
で数は多いです。」

「・・・なぜそんなに詳しいんだ？」

「一年に一回ここを掃除しますから、その時に。」

ラナと話ながら武器のある場所を見ていく。

槍、斧、弓、剣、etc・・・

見える範囲ではあるが数が多い。

「・・・鎌？」

壁に掛けられているかなり大きい鎌がある、先っばが槍になってお
り、鎌の反対に斧がついている。

「それは建国当時からある鎌ですね、扱いがかなり難しいですから、あまりおすすめはしません。」

「持ってみてもいいか？」

「ええ、どうぞ。」

持ってみるとズシリとした鉄の重さが手に掛かる。

黒い鎌が蝋燭の明かりに当たり光る。

かなりの業物かもしれない、そう思っていると、聖夜達が戻ってきた。

いつ復活したのかバルドもいる。

「二見也くたすけるよ」

「……そろそろ自分で対処できるようになれ。それより、この武器をどうみる？」

「鎌？ってこれは……」

聖夜は真剣な表情になり鎌の刃をみる。

聖夜は剣道をやっていたおり、刀を見る目も鍛えていたから刀を鑑定することができる。

「かなりの業物だぞこれ、刃の鋭さもそうだけど、ついている槍や斧の方もしっかり作られているし、手入れもしっかりされている。」

「ここにずっとあったらしい、お前がそう言うなら業物なんだろう、これにするとしよう。」

鎌を肩にかけ、ラナに話しかける。

「構わないか？」

「王女様におっしゃってください、私では決められませんので。」

「構いませんわ、その為にここに連れてきたのですから。」

即答、なら構わないか。

「そうだ、セレンから聞いた話なんだけど……」

「500年前にも、か。」

「ああ、俺達と同じ異世界人らしいんだ。」

500年前、この国を作ったのが自分達と同じ異世界人らしく、セレンティスアはその人間、初代国王に使われていたらしい。

とはいってもその時の記憶はないらしい、国王が死んだ後にセレンティスアは具現化したからわからないのだ。

「てか500年もたっているのになんでその鎌は錆びてないんだ？」

「保存の魔法ですよセイヤ様」

「保存？」

「はい、ここにあるような貴重なものなどにかける魔法で、使ったものは、数ヶ月ですが腐敗しないんです。」

「ふうんそうなんだ・・・」

・・・もはやなんでもありだな

「とりあえず外に出ましょう、ここは暗すぎます。」

「そうだな。セイヤ殿、ニミヤ殿、このあと兵士たちがいる訓練場に向かいましょう、自分の得物は手に馴染ませておいたほうがいいですからな。」

「・・・この鎌はどうする？聖夜のように剣ではないから鞘なんかないぞ。」

鎌は刃が隠せないので困っていると。

「でしたらこれでとりあえず・・・」

ラナがなぜか包帯をとりだし鎌に巻きつけ始める。

「・・・なんで包帯なんだ？」

「これしかありませんからね、またあとで刃を覆うものを探しましょう。」

しばらくして刃の部分だけ包帯でぐるぐる巻きになった。

何だか変な感じがするがしょうがない。

訓練所（前書き）

自分「この小説をみてくれ、どう思う？」

悪友「すごく・・・駄文です・・・」

自分「（・・・ω・・・）」

とりあえずできたので投稿

訓練所

宝物庫をでたあとセレンティスアは剣に戻った。
セレンティスアいわくもう少し寝ていたいらしい。

ラナとクランは途中で別れた、仕事があるらしい。
クランが嫌がっていたが耳を引っ張られて連れていかれた。

城の庭に出ると、剣を打ち合う音が聞こえてくる。

「ここが訓練所だ、城壁の内側にある。」

何人もの兵士が走り回り、剣を振るっている。

だが――

「なんか少ないか？」

兵士がほとんどいないのだ、訓練所の二画に集まり訓練している。

バルドが眉間を押さえながら

「今は戦争中だ、王を守るための近衛騎士団と新兵ぐらいしかおらんのだ。」

「どちらにしてもシウルトムの砦が破られれば私たちの負けは確定だな。」

急に後ろから声をかけられ振り向く。

「……誰だ？」

「そいつらが勇者か？貧弱な体つきしかしてないが。」

銀の髪に橙色の目、体は銀色の鎧を装備している。

「……レイア、いくらお前といえどもこの二人を侮辱することはゆるさんぞ。」

レイア、そう呼ばれた女は上から目線で言う。

「ふん、異世界から喚んだからといって強いとは限らんだろう。しかもそつちの男はなんだ？鎌を背負っているが見る限り素人じゃないか。姫、このような者達に頼らずとも我々は勝利いたし、必ず敵を討ち滅ぼします、何卒、近衛部隊の出陣の御許可を。」

レイアはアリシアの前で跪きそう言う。

「そんな・・・あなたも信じないというのですか？！伝説の勇者は今日の前に「姫！」っ！」

「よくお考えを、確かに伝説の通りになっております。それは事実でしょう、ですが戦えるかどうかは別！いま、シュルトムの砦にいる者達は命を賭け、この国を守ろうとしています。どうか、彼等にも目を向けてやってください。」

王女はなにも言い返せずうつむく。

「なら・・・力があることを証明すればいいのか？」

「セイヤ様？！」

聖夜は本気のような・・・出る幕はないか。

「・・・示せるというのか？自惚れる訳ではないがこれでも剣には自信がある。」

「セイヤ殿やめておいた方がいい、レイアは近衛隊随一の剣士だ、経験の差が違う、私よりも強いのだぞ。」

バルドは止めに入るが、聖夜はきにしたようすもなく言う。

「大丈夫です、勝てますよ？この人弱いですから。」
「「「?!」」」

聖夜がいった言葉に三人は凍り付く。

「ふ、ふふふふ……あーっはははははは！」

突如としてレイアが笑いだし、聖夜に向かって言う。

「こ、これは面白い！私に勝てるだど？笑わせてくれる！」

その目に闘士を燃やしながらレイアはいう。

「決闘だ！」

聖夜Side

自分は近衛兵から木剣を貰う。

アリシアとバルドに止められたが自分は問題ないとおもう。

だって——弱いから。

立ち振舞いや歩き方に実力が出ていた、でも、それだけじゃあだめだ。

確かに、いきなり異世界から来た勇者に全部まかせる、元からいた人達はいいい気はしないだろう。

なら、力を示すだけだ、自分の力を。

レイアSide

私は異世界から来たセイヤとやらに目を向ける。

太陽に光る金色の髪に、全てを見通すが如く青い目、整った顔立ち。なかなかいい男だ、だが、そういった者達に限って私の剣の腕には敵わなかった。

弱いくせに男は吠える、隊長のバルドは別としてだがな、あの人の王女への忠誠心は見習うところがある。

もちろん私も負けはしない、この勝負に勝ち、近衛隊の出陣を許可して貰わねばな。

「覚悟はできたか？セイヤ。」

「……」

セイヤはなにも言わずにただこちらをみる。

「臆したか？まあいい、合図を「わたしがやろつ。」隊長……」

隊長が出てくる、そして右手を上げる。

「あくまで模擬戦だ、お互いに熱くなりすぎないようにな。双方、準備はいいか？」

「いつでも。」

「大丈夫だ。」

「では……始めっ！」

その言葉と同時に私は突っ込んでいった――

剣を下段から振り上げる、だが奴は体を反らすだけでそれを避ける。

そのまま今度は右に木剣を振り抜く、後ろに飛び退き避けられる。

「どうした！逃げてばかりではないか！」

すぐに距離を詰め上段から降り下ろす、奴は右に体を反らして避ける。

一度距離をとり、剣を構える。

「なぜ反撃しない！貴様の力はその程度か！」

まだその剣は下げたままだ、随分と余裕がまだあるらしい。

「じゃあ、次で終わらせましょう。」

そっつい、剣を何故か腰にあて、左手をそえる。

（ふざけているのか？ いや、違う、本気になった?!）

急に私の中で恐怖が膨れ上がる。

どうみてもおかしい構えなのに、隙が全くない。

木剣でやっているはずなのに自分が斬られるような感覚、まるで本当の剣でやっているようだ。

苦しいほどに時間が長く感じる、こんなのは経験したことがない――

いつのまにか汗をかいている、剣を持っていた手もべたついてくる。

「っ！ はあああああああ！」

一瞬だけやつ剣が揺れ、その瞬間に私は一気に斬りこみ――

大きく吹き飛ばされた――

二見也Sied

はじめにレイアが切りかかるが聖夜に余裕を持ってかわされている。

「どうした！逃げてばかりではないか！」

高速で迫る木剣にたいし、あっさりとよけていく、あいからわずの動きだ。

「なぜ反撃しない！貴様の力はその程度か！」

「じゃあ、次で終わらせましょう。」

聖夜は居合いの構えをとり、本気の殺気をだす。

・・・あの状態の聖夜に勝てる気はしないな。

横にいた王女とバルドも殺気に当てられたらしい、思わず腰の剣に手がのびている。

数十秒、僅か、たったその時間だが静寂が周りに満ちる。

聖夜の剣が一瞬揺れる、その瞬間レイアが斬りかかり――

バキッ！

――城壁まで吹っ飛ばされいった。

「バルド、審判はどうした。」

とりあえず衝撃的なのは分かるが。

「あ、ああ、勝者、セイヤ殿！」

アリシアはセイヤに飛び付いている、右手の木剣は無残に折れていた。

強さというもの（前書き）

お年玉ゝお年玉ゝ

でも一話だけにゝ

強さというもの

聖夜Side

自分は折れた剣を見て思わず頭をかく。

「すみませんバルドさん、折れちゃいました。」

「あ、ああ、別に構わんさ、いくらでもあるしな。」

周りにいた兵士達がレイアさんを担架に乗せて運び出していく。

それをみておもわず呟く。

「やりすぎちゃったかな……」

見ると二見也がこちらに来て折れた剣を見る。

「よく西洋剣で居合いができたな。」

「ああ、鞘がなかったからな、添えるだけなら居合いもどきはできる。」

「居合い？それは何ですか？」

右腕に抱きついてしているアリシアが不思議そうに聞いてくる、という
か離す気はないのか。

「本当は刀で・・・ああ、刀っていうのはこの剣が曲がった感じ
のやつなんだ。」

「ん？まで、それなら武器庫にあったような・・・」

取ってくる、と言ってバルドさんは行ってしまった。

「刀・・・聞いたことがありませんね、いったいどんな形何でし
ようか。」

「まあその刀を使ってやるのが居合いという剣術なんだよ。」

「ケンジュツ？」

アリシアは本当にわからない様子だ、顔を傾ける仕草、可愛いな。

何となくそう思いアリシアの頭を撫でる。

「ふえっ?! / / / /」

「ん？ああ、ごめんごめん、それで話を続けるけど、剣術っていう

のは自分達の世界にある刀を学ぶためにある術なんだ。」

頭から手を離すとアリシアは少し寂しそうにする、俺何かしたか？

「その剣術、というのがセイヤ様が強くなられるために習われた武術なんですね。」

「まあ、正確に言えば心を学んだって言う方が正しいかな。」

「心……ですか？」

「うん、力や剣の振り方は勿論、それを完璧なまでに実戦でできるくらいに剣を振る、でも自分は師匠に言われたんだ、お前の剣は曇ってる、そして心を学ばされた。」

技術や体の強さだけじゃだめなんだ、剣の声を聞いて、それに答えないといけない、変な話だけどこれが俺の師匠から学んだことだよ。」

そのときちょうどバルドさんが戻ってきた、手に持っているのは蛮刀だ。

「これではないか？曲がっている剣といえばこれしかないからな。」

「それは蛮刀というもので刀とは違うんすよ。」

「む？そうか、前に山賊を討伐した時に手に入れた代物だったんだ

がな。」

山賊って本当にいるのか……

「そういえばニミヤ殿はどうするのだ？手合わせなら私が代わりにやるが。」

「……いや、いい、まだこの鎌自体よくわからない、あとで少し振ってみることにしよう。」

包帯でグルグル巻きになった鎌を触りつつ、そういつ。

「ふむ、ではまた後日ということでは……アリシア様？」

「ほえっ？！／／／あ、ああごめんなさい。／／／／」

「どうかしたのか？」

「い、いえなんでも／／／」（しゃべっていたセイヤ様の横顔に見惚れていたなんていえない。／／／／）

「ふむ、では次に魔力を調べに行きましょう。」

「魔力？」

魔力、ということとは。

「魔法がつかえるか否か、それを調べにゆくのです。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3379t/>

勇者の影

2012年1月1日07時45分発行